

青森県立高、遠隔授業初試行

小規模校新スタイル

2027年度から小規模校などで導入を目指す青森県立高の遠隔授業について県教委は本年度、冬休みを利用して三戸など5校で試験運用を初めて行った。青森市の配信拠点と結んだ授業は大きな混乱なく終了。生徒からは「分かりやすい」「違和感はない」などの感想が上がった。県教委は26年度も試験を継続し、課題を整理する。少子化が進む中、学びの新たなスタイルの定着に取り組む。

（加藤弘也）



試験的に行われた遠隔授業。生徒が青森市の配信拠点にいる教師から数学を教わった＝9日、青森県立三戸高

三戸高など ⇔ 青森の配信拠点 生徒「違和感ない」



生徒がタブレットに書き込む内容はリアルタイムで教師が確認できる

遠隔授業は地域格差なく生徒の多様な学習のニーズに応えるのが目的。学校規模により全科目で専門の教員を配置することや、習熟度に応じた個別指導を充実させるのが難しい実情を踏まえた。27年度から遠隔授業で単位認定されるのは数学と物理。三戸、野辺地、三木、農業志拓、鯉ヶ沢、五所川原工科の5校で手始めに3年生を対象にする方針だ。試験運用では2年後を見据え、1年生の数学を取り上げて1時間の補習を3日間行った。

「じゃあ時間を取るので、

隣近所と相談しながら解いてみよう」

三戸では9日、11人が教壇前の65型のモニターと向き合い、それぞれの端末で2次関数の最大値を求める課題に取り組んでいた。

遠隔授業では配信側が各生徒の端末の情報を共有できるアプリを使用。「aが消える。そこを直せば全部分かるよ。教師が説明の合間に、ノート」を模に、全科目で専門の教員を配置することや、習熟度に応じた個別指導の場が多々あった。

教師の映るモニターはスピーカーや集音マイク、カメラが搭載された専用機器で、後ろの席の生徒も声を聞け、三戸、野辺地、三木、農業志拓、鯉ヶ沢、五所川原工科の5校で手始めに3年生を対象にする方針だ。試験運用では2年後を見据え、1年生の数学を取り上げて1時間の補習を3日間行った。

生徒が雑談する光景も見られ、モニター越しなのを除けば、普段の教室でのものだ。

授業をした県総合学校教育センター高校教育課の神集司指導主事は「アプリのおかげで成り立っているという実感。目の前に生徒がいて、普通に対面でやっている感覚で進んできた」と振り返った。

参加した宮坂凛太郎さん（16）は「画面共有してアドバースをもらえるのは良い」。坂本賢翔さん（16）も「先生が書く内容を主元の画面で見られて理解しやすかった」と好印象を語った。

県教委はこれまで先行事例の高知県や大分県を視察。今後は理科の実験を遠隔で実施する北海道にも赴

く予定だ。遠隔授業の本格運用を目指す、資料のデジタル化や通信環境整備、教える側のノウハウ習得など体制づくりに当たる。

高校教育改革推進室の秋田春樹指導主事は「多様なニーズに対応する教育環境を実現できるよう課題を整理し、導入に向けて取り組みを進める」と話す。